

# FOCUS Vol.19

長洲町でキラリ輝く人たち

「作ることは人生の楽しみ」  
豪雨災害時に有明海岸に流れてきた流木を使って  
「流木アート」を製作

みず まち まさ たか  
**水町 雅孝**さん (64歳 出町)



今にも飛び立ちそうなほど、躍動感がある鳥たち。これも全て流木から作られている。



「将来は画家になってみようかな」とほほえむ水町さん。工作以外にも絵画など多彩な趣味を持つ。

「流木は海からの贈り物だと思っています。  
生まれ変わって木も喜んでくれたらうれしいですね」



「海に流れ着いた木々を見るとき、そのまま捨てられるのもつたない、自分の手で何かしてあげたいと思いました」。そう言いながら彫刻作品を手取る水町雅孝さん。平成24年7月に九州を襲った「九州北部豪雨」。作品はそのときに有明海岸に流れ着いた流木を削って作られたものだ。

水町さんは28歳から61歳まで地元のパン屋として昼夜、土日関係なく働きずくめだった。そんな無理がたたってか、61歳のときに脳梗塞を発症。幸い大事には至らなかったが、仕事は制限し、自分の時間を持つようになった。「病気をして自分のしたいことをしようと思いました」と当時を振り返る。

水町さんがウッドカービング(木彫)と出合うきっかけが豪雨で流れ着いた流木だった。「これは海からの贈り物」そう感じた水町さんは、再利用して何か作れないかと思いい、何本も家に持ち帰った。そこで、独学ながらナイフとサン

ドペーパーを使ってウッドカービングを始めた。「試行錯誤しながら1日3〜4時間、気付いたら朝ということもありました。でも、自分のイメージ通りにできたときの達成感が大好きでついやってしまうんです」と笑顔を見せる。作った作品はホオジロ、スズメ、魚、カニ、マジックなど40以上。昨年は町文化祭に展示して、来場者に流木が生み出すアートの魅力を伝えた。「多くの人に、喜んでもらえれば、それが作る喜びにもつながります」。作品の一部は町に寄贈され、現在、金魚と鯉の郷広場内「金魚の館」にも展示されている。

「自分の根本は『もったいない精神』。本来捨てられるような流木だって、生まれ変わればみんなに喜んでもらえる作品になります。何にでも『もったいない』と思うことが大切です」と話す水町さん。これからもその精神を原動力に、新たな作品を創り続けていくに違いない。